

『宗教理論と宗教史』における試験問題 作成とプリテスト

石井 研 士
島田 裕 巳

1. 調査の目的と意図

コースチームの作業の一環として問題作成の作業も行なわれた。これは、放送大学のそれぞれの科目で各学期の中間に実施される、通信指導問題と単位認定試験問題に相当するものである。これもまた、コースチームで印刷教材ならびに放送番組を担当した人間が、それぞれの担当箇所に対応する部分の範囲から出題することとなった。

『宗教理論と宗教史』の場合、その問題は宗教学の理解あるいは宗教現象の理解を問うものとなるわけだが、その性格上何が正しい理解であるかを定めることがそれ程簡単ではない。そこに問題作成上の難しさがあった。したがって、問題の作成と検討にはかなりの時間を要したが、仲々満足のいく問題は出来なかった。この調査の目的は、問題作成の作業の途中において、試作した問題がどの程度理解されたかを知り、『宗教理論と宗教史』にふさわしい問題の在り方を知ることであった。その意味で今回の調査はプリテストと呼ぶべきものだったのである。

2. 調査方法

2-1. 実施方法

ここで分析するプリテストは、二度に渡って行なわれた。質問紙は以下のよう
に 15 問から構成されている。問題作成に当たったのは『宗教理論と宗教史』の
コースチームのメンバーで、各自が担当した章の範囲から問題を作成した。

問 1～6 作成者 島田裕巳 出題範囲 第 1 章 1 節

問 7～12 作成者 林 淳 出題範囲 第 4 章 1, 2 節

問 13～15 作成者 石井研士 出題範囲 第 5 章 1, 2 節

＊ブリテスト問題

問 1 次の事項の内、宗教と最も関係の薄いものを一つ選べ。

1. 誕生日に友達からプレゼントをもらった。
2. 正月元旦に家族で初詣に出掛けた。
3. お彼岸に祖父の墓まいりをした。
4. 結婚式では二人で三三九度の杯を交わした。

問 2 調査によれば、日本人の信仰率は 36 パーセントであるといわれるが、それについて正しいと思われる解釈を一つあげよ。

1. 日本人の信仰率の低さは、日本に宗教が根づいていないことを示している。
2. 世界的に見て日本人の信仰率はかなり低い、宗教への関心はかえって強い。
3. 日本人の信仰率の低さは戦後の傾向で、宗教が力を失っていることを示している。
4. 世界的に見て日本人の信仰率は高く、宗教への関心ははっきりしている。

問 3 日本における宗教の状況について誤っているものを一つ挙げよ。

1. 宗教の博物館といわれる日本では、世界の三大宗教がすべて定着している。
2. 日本は中国・朝鮮から宗教的影響を強く受け、仏教や道教は民間の信仰にまで浸透している。
3. キリスト教は文化的・社会的な面で日本の宗教文化に影響してきたが、信者数はそれほど多いとは言えない。
4. 神道は日本の民族宗教であり、習俗とまじりあう形で生活の中にとけこんでいる。

問 4 日本人の宗教意識の特徴について、誤っているものを一つ選べ。

1. 形式化した宗教儀礼に批判的で、宗教を個人のものとして考える傾向が強い。
2. 信仰を持たないと言明することにそれほど抵抗感がなく、宗教を生活から

特別にきわだったものとして意識していない。

3. 宗教的と考えられる儀礼に親しむ機会は比較的多いが、その宗教的意味をそれほど掘り下げない。
4. 排他的な姿勢を示す宗教団体を好ましいと考えないが、他の面では宗教に対して比較的寛容である。

問5 日本の宗教について次の記述から正しいと思われるものを一つあげよ。

1. 七夕は、元来インドに始まる仏教の行事である。
2. 神道式の結婚式は、古代からの日本の伝統行事である。
3. クリスマスはアメリカに始まり、戦後日本に伝えられてた行事である。
4. 盆は仏教と日本の民間宗教が習合した行事である。

問6 宗教をとらえる視点について、間違っていると思われるものを一つあげよ。

1. 教義・教団・戒律という三つの要素を中心に、各宗教の共通点と相違点を見ていかなければならない。
2. 宗教を比較研究するためには、特定の宗教の見方にとらわれることなく、客観的にとらえようとしなければならない。
3. 宗教が各々の社会の文化的な背景とどう関わっているかを常に意識して、生活の場での宗教をとらえなければならない。
4. 宗教の全体像をとらえるには、小数の宗教的指導者の思想だけを考えるのではなく、一般の人間の宗教とのかかわりを視野におさめなければならない。

問7 この世における誕生から始まる成人化の過程と、あの世における死から始まる祖霊化の過程とは、ほぼ対応しているといわれる。その例としてあてはまらないものを一つ挙げよ。

1. 新しい名前が与えられる。
2. 汚れた存在であったのが、儀礼をへる事によって、清まった存在になる。
3. 年を経るに従って、一人前の存在となり、個性を発揮する。
4. ほぼ22・33年の長さで、一人前の存在して完成する。

問8 次にあげるうちから、柳田国男の著作でないものを一つ挙げよ。

1. 死者の書。
2. 遠野物語。
3. 海上の道。
4. 先祖の話。

問 9 柳田国男の先祖観と関係のないものを一つ選べ。

1. 死後も霊はこの世に止どまり、遠くへ行くことはない。
2. 父と子の協調の関係と緊張の関係が反映し、愛と憎しみの心理から成り立つ。
3. 民間の様々な神も元をたどっていくと先祖の霊であり、先祖崇拜は日本人の最も古くからの宗教である。
4. 盆と正月は、どちらも先祖の祭りであり、共通点が多い。

問 10 次の中で誤っているものを一つ挙げよ。

1. 奄美・沖縄での先骨は、死後何年かたった後に骨を洗う、手間をかけた葬法である。
2. 中国・朝鮮の先祖崇拜は、儒教を基本としているが、日本の場合はそうでもない。
3. 先祖はあの世で安らかに過ごすものであり、子孫に対して報復をおよぼすことはない。
4. 中国・朝鮮の祖先崇拜のように、小家族をこえた同族という大きな祭祀集団を、日本の祖先崇拜は持たない。

問 11 先祖崇拜に最も関係の少ないものを一つ選べ。

1. ハロウィーン。
2. エディプス・コンプレックス。
3. パロマ。
4. スケープ・ゴート。

問 12 盆行事と関係ないものを一つ選べ。

1. 大文字焼。
2. 迎え火。
3. うら盆経。
4. 若水汲み。

問 13 非宗教的な契機による集団が、そのまま宗教集団になっている「合致的宗教集団」を説明する記述として、適切なものを一つ選べ。

1. 人々は、かなり明確に教義を理解し、信仰によってその集団に帰属し、集団の独自性をはっきり意識している。
2. 聖職者と在俗信者が機能分化した組織を持っている。

3. 宗教集団の長が政治集団の長であったり、宗教法が同時に国家の法となっていない。

4. 人々は、伝承された神話や儀礼の中に生まれ、宗教が日常生活の中にくみ込まれている。

問 14 セクトの性格について、正しくないと思われるものを一つあげよ。

1. 自らの意志によって加入する。
2. 現世に対しては「抵抗（プロテスト）」の姿勢が強い。
3. 聖職者と俗人は区別されている。
4. 神の恵みと救いは、自らの「主観的」な意志や体験によって確かめられる。

問 15 日本の宗教集団についての記述で、適切であると考えられるものを一つ選べ。

1. 中世の仏教は、西洋でのキリスト教のチャーチにあたると考えられる。
2. 明治以降に伝道されたキリスト教は、日本人一般に多い「合致的宗教集団」と調和した。
3. 村や町の氏神は、独自の宗教集団としての性格が強い。
4. 日本の新宗教運動は、しばしば体制変革を求め、セクト的性格を持つ場合がある。

第1回目は、昭和59年11月に『宗教理論と宗教史』の主任講師の一人である阿部美哉とコースチームのメンバーである林淳とが講師をしている日本女子大学の宗教学の授業を取っている学生に対して、その授業中に行った。問題として出題されている部分について直接授業で取り上げられたようなことはなかった。第2回目は、同月に東京大学の宗教学研究室の助手（当時）である金井新二氏が講師をしている専修大学と国学院大学で、同氏の授業中に行なわれた。解答はその場で記入してもらい、回収した。サンプル数は、無効を除いて、第1回目が291、第2回目が80、総数は371である。また、それぞれの平均正答率は、48.0パーセント（7.2題）、47.1パーセント（7.1題）である。

2-2. 集計結果

二つのサンプルは、各問の正答率に差異がみられたものの、総計した正答率には大きな差異を認めることはできなかった。以下の分析では、両サンプルの総正答率がほぼ同じであったことを考慮し、両サンプルの差異については、必要に応じて触れることにしたい。表1は、サンプル1とサンプル2の各設問の正答数およびそのパーセント、両サンプルの正答率の差異、総数を表している。また、図1は、サンプル1とサンプル2、および合計の正答率パーセントをグラフに表したものである。

そして、図2は、サンプル1、サンプル2、および総数の得点分布である。最高点は1点、最低点は12点であった。

表 1

問題番号	サンプル1	サンプル2	正答率の差異	総 数
1	90.7 264	80.0 64	+ 10.7	88.4 328
2	36.8 107	25.0 20	+ 11.8	35.6 132
3	79.4 231	75.0 60	+ 4.4	78.4 291
4	88.7 258	60.0 48	+ 28.7	82.5 306
5	52.9 154	43.8 35	+ 9.1	50.9 189
6	40.5 118	52.5 42	- 12.1	43.1 160
7	30.2 88	28.8 23	+ 1.4	30.0 111
8	22.0 64	46.3 37	- 24.3	27.2 101
9	56.4 164	47.5 38	+ 8.9	54.4 202
10	49.1 143	42.5 34	+ 6.6	43.7 177
11	12.7 37	11.3 9	+ 1.4	12.4 46
12	69.1 201	73.8 59	- 4.7	70.1 260
13	15.1 44	33.8 27	- 18.7	19.1 71
14	44.0 128	42.5 34	+ 1.5	43.7 162
15	32.0 93	43.8 35	- 11.8	34.5 128
平 均	48.0 2094	47.1 565	+ 0.9	47.8 2659

図1 正答率

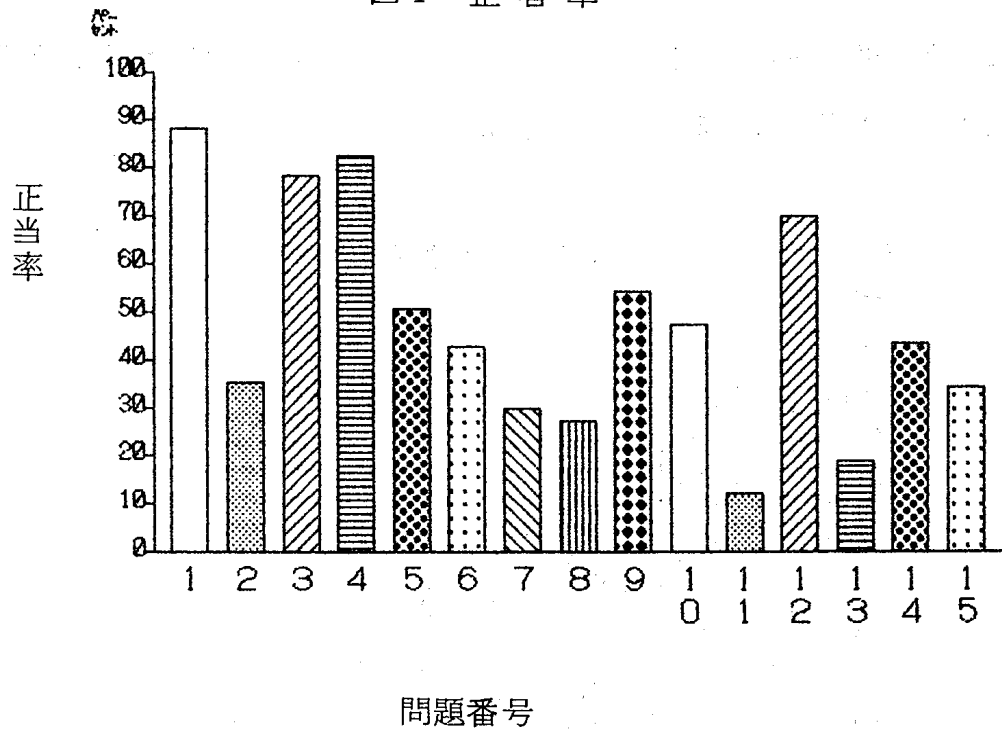
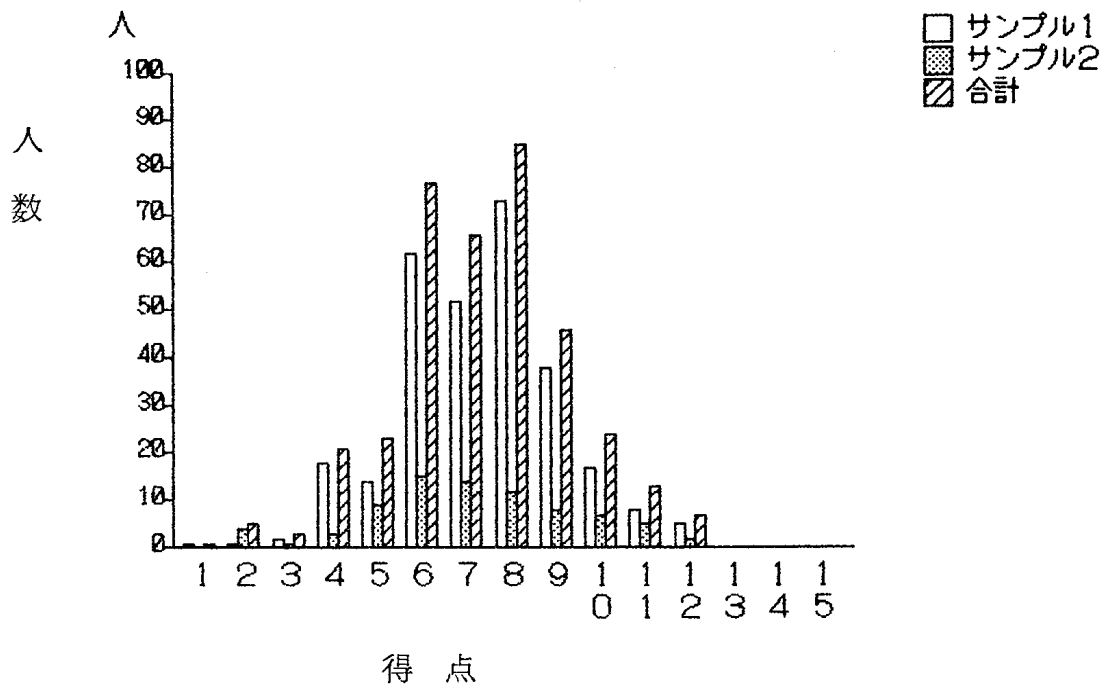
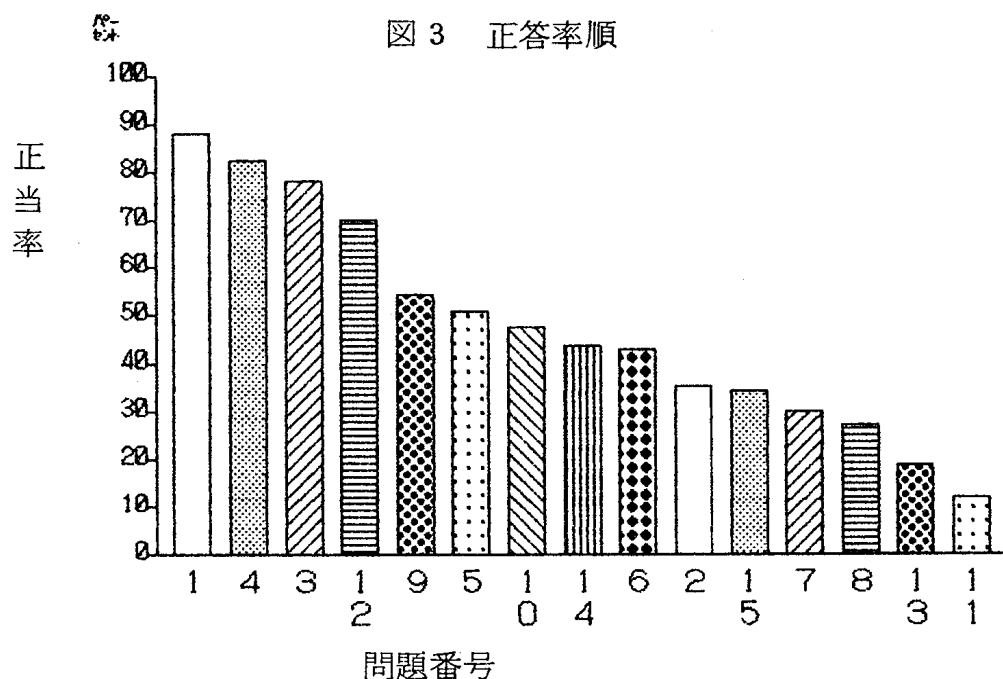


図2 得点分布



3. 分 析

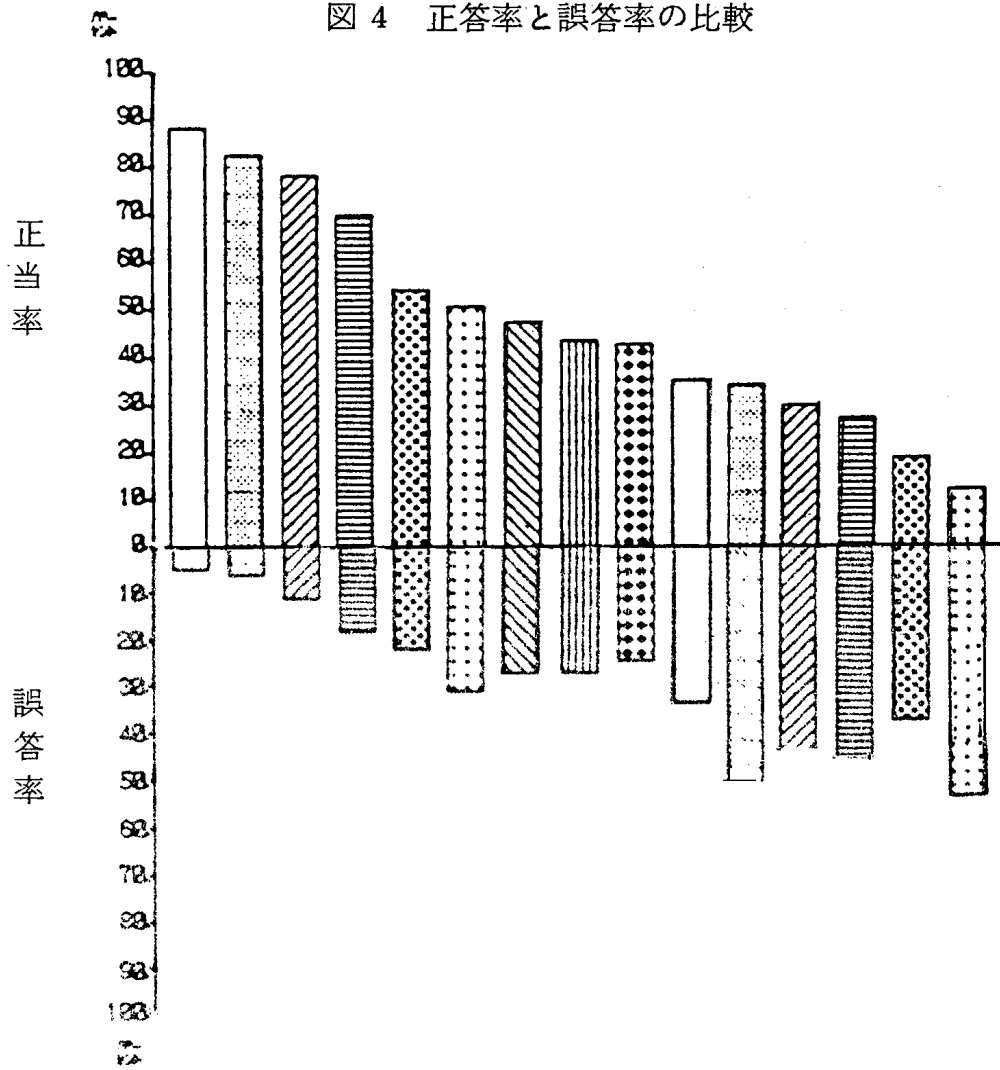
図3は、各設問を正答率順位に並べたものである。図から明らかなように、正答率には大きな差異を認めることができる。



問1が最高の88.4パーセントの正答率であるのに対して、最低の問11の正答率はわずかに11.4パーセントにすぎない。およそ7倍の開きが存在する。

問題の正解を考察する場合には、単に正答率の高さのみを問題とするのではなく、誤答率の高さをも考慮しなければならない。この点を踏まえて、各問における正答率と最高の誤答率を組みあわせて作成したのが図4である。正答率が出た問題は、必然的に他の残りの選択肢の誤答率は低くなるが、逆に、正答率が低い場合には、様々な解答パターンを見出すことができる。グラフには各問の中で最も高い誤答率を示した選択肢のパーセントを含め図示した。また、正答率と最高の誤答率の差異を示したのが図5である。

図 4 正答率と誤答率の比較

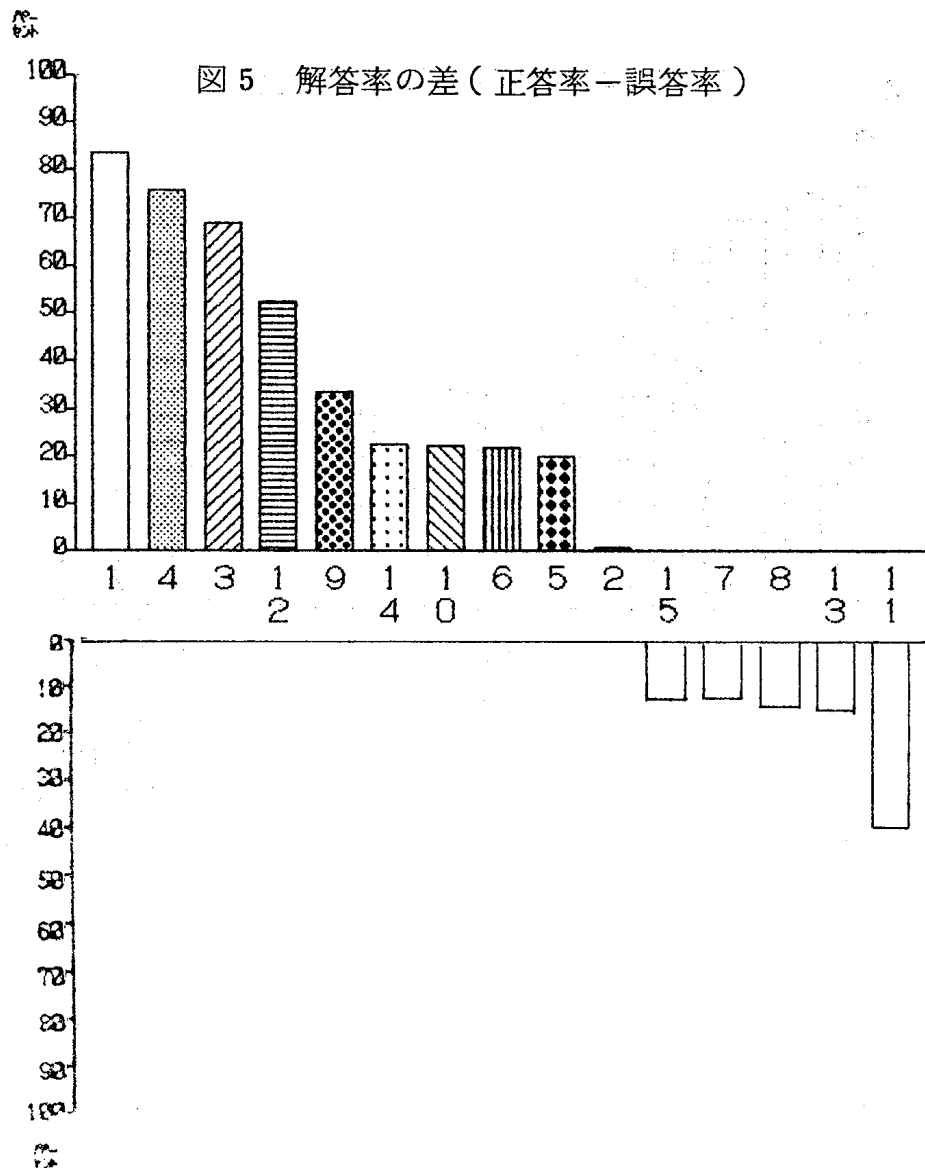


テスト全体の平均点は別としても、各設問を取り上げて考えた場合に、どの程度の正答率が望ましいかは判断に難しい問題である。正答率の高さと問題の良さとは必ずしも対応するわけではない。誤答率は低くとも良問は存在する。以下、ここでの数値を踏まえて、設問内容、設問形式との関係から分析を試みたい。

各設問を正答率と誤答率の差から、3つのグループに分けて考える。第1のグループは、正答率が圧倒的に誤答率を上回っているグループである。問題番号でいえば、問1、問3、問4、問12がそれにあたる。

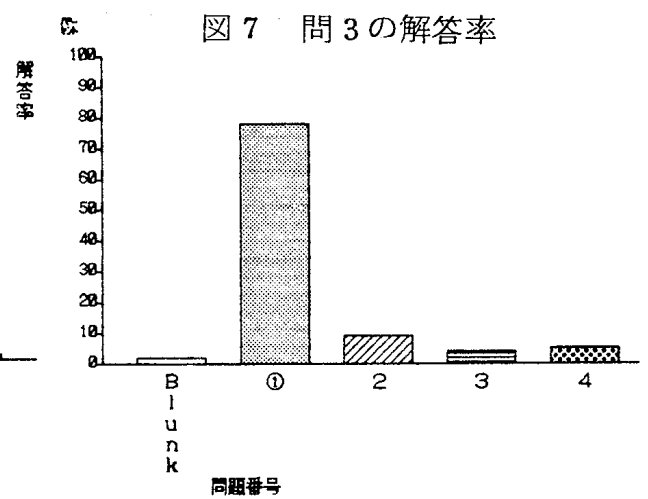
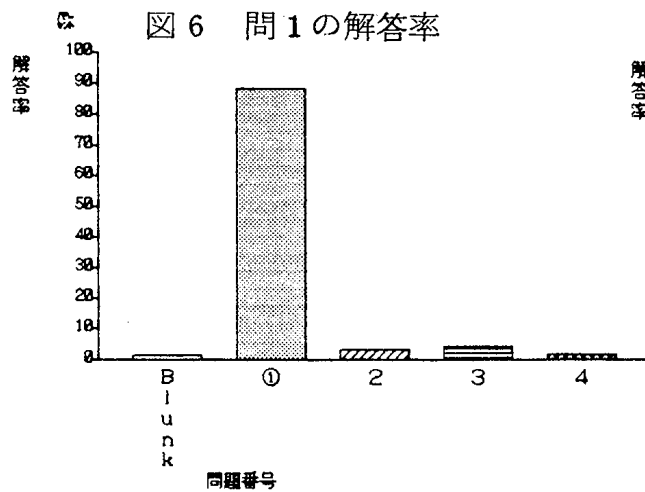
第2のグループは、逆に、誤答率が正答率を上回ったものである。問7、問8、問11、問13、問15がそれにあたる。

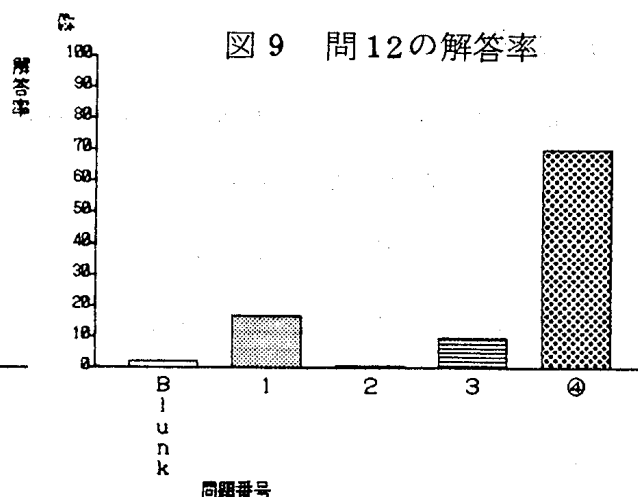
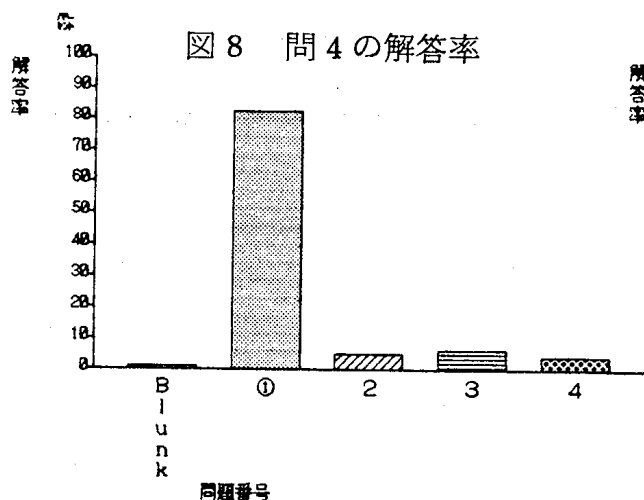
第3のグループは、両者の中間に位置するものである。問2、問5、問6、問9、問10、問14がそれにあたる。



3-1. 第1のグループ

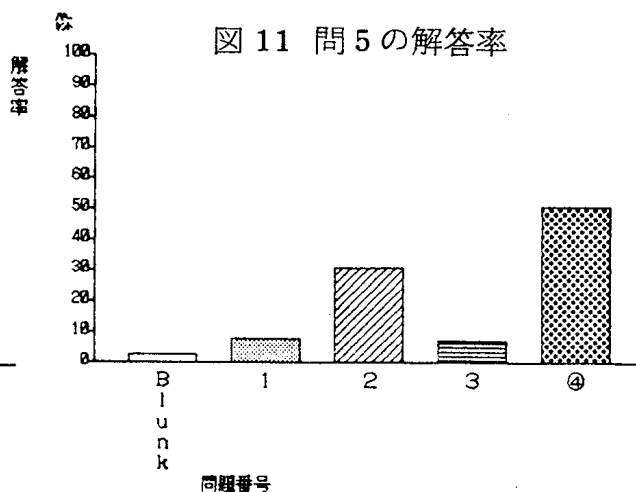
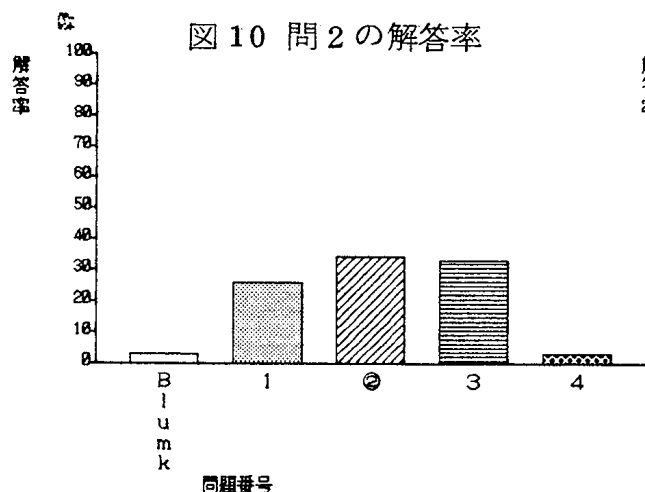
第1のグループの各設問肢の解答率を示したのが以下の図である。





問 1 から問 5 までは、ともに日本の宗教、あるいは日本人の宗教意識をテーマにしている。それにもかかわらず、問 2、問 5 の正答率と誤答率にこれだけの差異が現れたのは何故だろうか。結論を先に述べれば、問 1、問 3、問 4 はともに、一般常識の範囲内で解くことが可能だからである。問 12 も同じ理由から解釈することができる。選択肢はどれも一般に馴染みのあるものであって、ことさら放送大学の講義を受講せずとも解くことができる。いわば、一般常識の問題である。

これに対して、同一テーマであっても、問 2、問 5 は、必ずしも常識で解くことのできない専門的な内容が盛り込まれている。問 2 と問 5 の解答パターンを示すと次のようになる。問 2 の選択肢 3 の誤答率が高くなっているのは、一般的な感覚に基づいて選択された結果ではないか。



3-2. 第2グループ

第2のグループは、正解の正答率が誤答の解答率を下回るものである。以下に示したのがその解答パターンである。

問11は、全問中最も低い正答率を示した問題である。内容が極めて難しい。それぞれの選択肢には説明が付されておらず、また、必ずしも耳慣れた項目ではない。設問を作成した当初から正答率の低さは予想されたが、その通りの結果が出た、ということになる。

残りの4問は、正答と誤答の正答率の差からいえば、ほぼ同じであるが、問7と問13が4つの選択肢のうち3つの選択肢に解答が分散しているのに対して、問8と問15は、1つの選択肢に集中している。問7と問13は、問題内容からいえば、各選択肢の内容が微妙であり、正解には十分な注意とそれまでの勉学の蓄積が要求される。

これに対して、問8と問15は、一つの選択肢に解答が集中しており、しかも、選ばれたのが誤答であったということである。しかし、ともに正解の解答率が次に高い。問8は、単純に知っているかどうかを問う知識型の問題であり、当然のことながら、この設問内容である柳田国男に講義において言及したか、あるいは誤答の対象となっている折口信夫の「死者の書」を知っているかどうかの問題の鍵となる。サンプル1とサンプル2においても正答率に大きな開きが見られた。(サンプル1は22.0パーセント、サンプル2は46.3パーセント)同様に問15も知識型の問題であり、始めて問に向かっても正解を得るのは困難である。総じて、サンプル1とサンプル2に見られた大きな差異は、当該の講義において触れられたかどうかに関係しているように思われる。

3-3. 第3のグループ

第3のグループは、第1のグループと第2のグループの中間に位置するグループであるが、それについては図を省略する。

図 12 問 7 の解答率

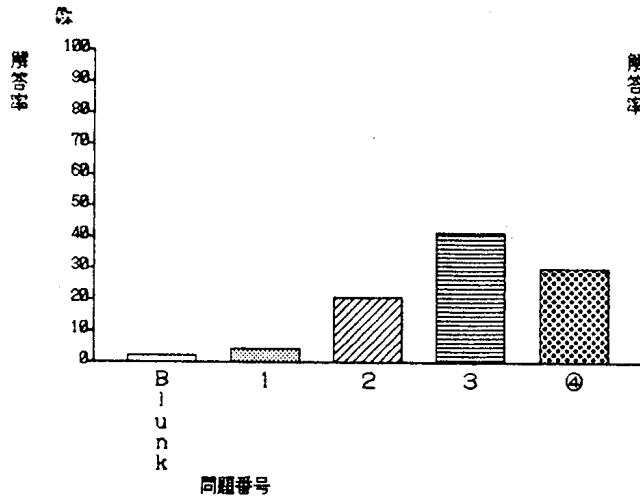


図 13 問 8 の解答率

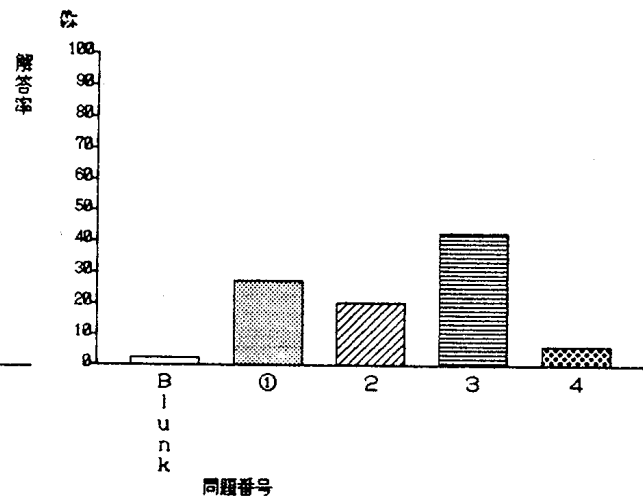


図 14 問 11 解答率

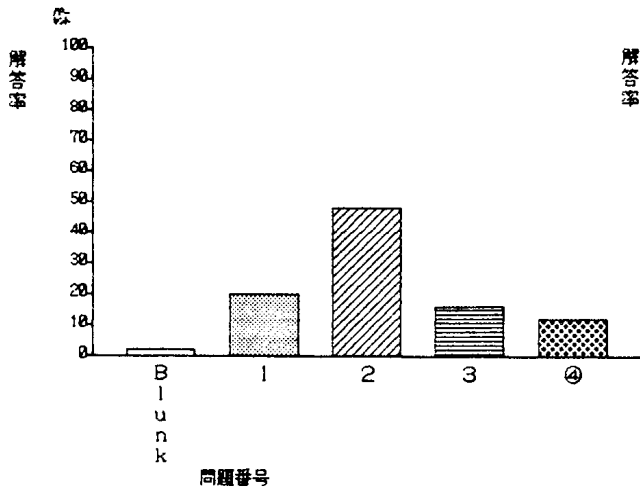


図 15 問 13 解答率

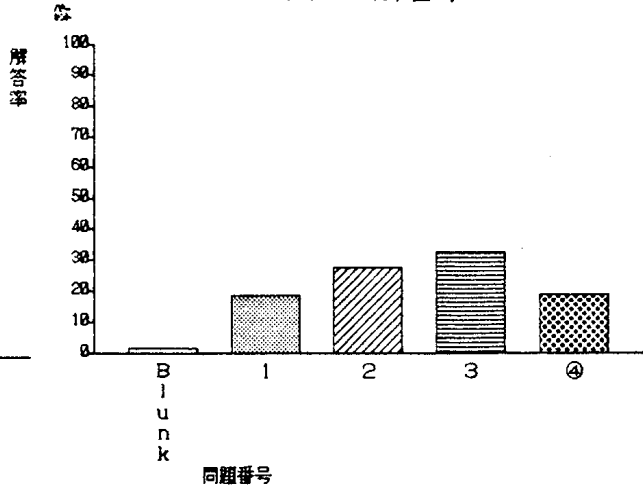
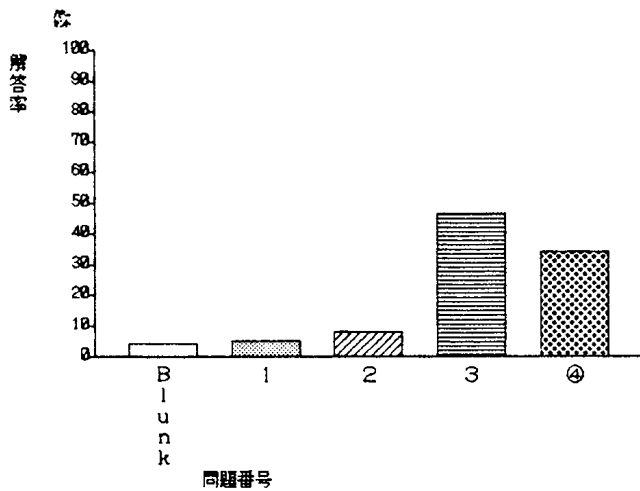


図 16 問 15 解答率



4. 結 論

このブリテストはあくまで、コースチームで作成した問題が、宗教学の問題としてふさわしいものであるかどうかを知るために行なわれたものである。余りに正答率の高い問題は、学習の行為と関係がない問題で放送大学で実際に使うに適したものとは言えない。例えば、問1がそれに当たる。また、ふたつのサンプルの間で、正答率が大きく違った問題は、その問題が尋ねている事柄について知識があるかどうかで正答率が変化したものである。テレビでの講義なり、印刷教材なりでその知識を与えているならまだしも、そういう機会がまったくないとしたらこれも問題としては不適確である。例えば、問8がそれで、サンプル2の中の国学院の学生は総じて柳田国男について知識があるわけである。問4については、講師の宗教観の違いがよく現れているものと思われる。サンプル1の講師（阿部、林）は日本人の宗教的意識に対して肯定的であるのに対し、サンプル2の講師（金井）は否定的だということである。そういった意識の違いが日頃の授業の中に反映され、学生の側が影響を受けたということではなかろうか。興味深い現象である。

こういったブリテストを行うことによって、問題が出題するにふさわしいものかどうか、こういった傾向の問題を作成したらいいかが判ってくるのだが、次に取り組むべき課題がある。それは、テレビによる講義を受講し、印刷教材で勉強したことによって、どの程度理解が進み、問題が解けるようになるかである。この点を調べるために別の形で調査を実施した。調査のサンプルとなったのは神奈川県立外語短大の学生である。島田が講師として担当している宗教概論の受講生（2年生）に、印刷教材を読ませ、テレビを視聴させた後、試験を実施した。第1回「日本人と宗教」と第2回「宗教の規定～聖と俗」の部分について行ったが、第1回については先の問題の問1から問6を出題し、第2回については新たに問題を6問作って出題した。さらに、同じ学校で宗教概論を受講していない1年生に対して、テレビも印刷教材も一切見せずに試験を実施した。（フェリス女学院大学の宮坂覺助教授に協力していただいた）問題は12問とも同じである。その

結果は以下の通りである。

1. 宗教概論受講生（2年生）

学 生	第1回正解数	第2回正解数	合計正解数（正解率）
1	6	6	12（100）
2	6	6	12（100）
3	6	6	12（100）
4	5	6	11（92）
5	5	5	10（83）
6	5	5	10（83）
7	5	5	10（83）
8	4	5	9（75）
9	4	5	9（75）
10	4	4	8（67）
正解数 の平均	5	5.3	10.3（86）

2. 非受講生（1年生）

学 生	第1回正解数	第2回正解数	合計正解数（正解率）
1	5	3	8（67）
2	5	3	8（67）
3	4	4	8（67）
4	5	3	8（67）
5	5	3	8（67）
6	5	2	7（58）
7	3	4	7（58）
8	5	2	7（58）
9	4	3	7（58）

学 生	第 1 回正解数	第 2 回正解数	合計正解数 (正解率)	
10	4	3	7	(58)
11	4	3	7	(58)
12	4	3	7	(58)
13	5	2	7	(58)
14	4	3	7	(58)
15	3	3	6	(50)
16	3	3	6	(50)
17	5	1	6	(50)
18	4	2	6	(50)
19	3	2	5	(42)
20	2	3	5	(42)
21	2	3	5	(42)
22	4	1	5	(42)
23	3	2	5	(42)
24	4	1	5	(42)
25	3	2	5	(42)
26	3	2	5	(42)
27	1	3	4	(33)
28	3	1	4	(33)
29	3	1	4	(33)
30	2	2	4	(33)
31	3	1	4	(33)
32	0	0	0	(0)
正解数 の平均	3.6	2.3	5.8	(49)

この調査は、特にテレビと教材を見せた学生についてサンプル数が少なく、この結果から何かを結論することは避けるべきかもしれないが、やはり教材の学習効果はあったと言えよう。特に第二回「聖と俗」の場合、教材に一切ふれたことのない学生の正答率は極めて低い。聖と俗という概念は、宗教あるいは宗教学についてほとんど知識のない学生にとっては、何の説明もなければ理解不能な概念であろう。教材を見せた学生の場合でも、その感想によれば第2回のほうが難しかったとのことである。もしそうであるなら、第2回の教材は聖と俗という概念を理解させるのに、それなりに有効な教材であったということになる。もちろん、そう言い切るためにはもっとサンプル数の多い調査を実施しなければならない。結論は、その時まで待って出すべきであろう。